

所長選考について(運営会議報告)

自然科学研究機構では機構長や所長の任期は一期目が4年、二期目が2年です。平成25年度は分子研の現所長の4年目でしたので、二期目(あるいは新たに一期目)に向けて所長選考を行う必要がありました。本機構では、機構長がその都度、研究所別に機関長選考委員会を設置し、その依頼を受けて運営会議が所長候補者を機関長選考委員会に推薦することになっています(機関長選考委員会は法人化前の評議員会に相当するが、常設ではない点などが異なる。運営会議は法人化前の運営協議員会に相当)。さらに分子研の場合、運営会議は教授会議の意向を十分に取り入れることになっています。今回、このような基本プロセスを維持しながらも、従来と異なる点がありました。そのいくつかは今後も適用されるものと考えられますので、ここでまとめておきます。

以下は今回、従来と異なった点です。従来方式については分子研レターズ60号(2009)60ページの記事「法人化後の所長選考」をご覧ください。

- (1) 所長候補者選考スタート時の手順が本来と逆になり、運営会議が先で教授会議が後になった。
- (2) 運営会議から機関長選考委員会への所長候補者の推薦人数が「2名以上」ではなく「1名以上」となった。
- (3) 機関長選考委員会で所長候補者に対してヒアリングが行われた。
- (4) 機関長選考委員会席上で、運営会議議長と副議長の2名が分子研の現状、今後の課題、次期所長に対する期待、推薦に至った経緯等の説明を行った。

上記(1)は今回のみの特例です。教授会議の意向を十分に取り入れるためには、本来、選考のスタートは教授会議を先、運営会議を後にすべきで、定例の教授会議が遅い場合は、臨時教授会議を考えるべきところだったのですが、今回は時間的にそれも無理でした。そのため、教授会議の情報なくても運営会議で決められる部分を先に行っておき、教授会議の選考が済まないと確定しない部分は、教授会議の後に書面審議の運営会議で確定させるようにしました。

上記(2)の変更は機関長選考委員会側の判断です。これまでは、二期目に関わる所長選考であっても一期目と全く同じ選考手順を踏むことを前提に、機関長選考委員会からは「2名以上」の所長候補者の推薦依頼が来ていました。そのため、運営会議での選考手順も教授会議での選考手順も2名推薦する前提で詳細が決まっています。今回の機関長選考委員会委員長の説明によると、機関長選考委員会において現所長から分子研の現状、今後の課題等を聴取した結果、「1名以上」にしたとのことでした。自然機構の他の研究所の機関長選考委員会でも二期目については一期目と異なる考えをとることが多いようです。とは言え、機関長選考委員会からは「長期的展望に立って分子科学研究をリードできる人材の中から幅広く(候補者を)求め」た上で「1名以上」を推薦との依頼が来ておりましたので、運営会議で議論の上、「1名以上」であっても「幅広く求め」るために従来通りの2名推薦を前提とした選考手順に従うことにしました(教授会議でも同様)。ただし、「1名以上」に対応すべく、2名の候補者を最終確定したあと、そのまま機関長選考委員会に推薦するのではなく、1名だけにするか2名にするかを教授会議、運営会議での得票数を考慮して運営会議として決定することにしました。

上記(3)の変更も機関長選考委員会側の判断です。すでに自然機構の他の研究所では運営会議側が推薦した候補者に対してヒアリングが行われており、分子研だけヒアリングなしを前提にはできないことが前回4年前の機関長選考委員会から運営会議側に申し送られていました。そのため、運営会議では2年ほど掛けて次回から候補者に対してヒアリングが行われるとしたら何に注意すべきかについて議論を続けてきました。その結果、機関長選考委員会と運営会議の間で、

- ①候補者を絞り込む際に重視する点などの意見のすり合わせの必要性、
- ②候補者に関する情報共有の必要性(候補者自身の抱負など)、
- ③運営会議での選考理由や選考経緯を正確に伝えることの必要性、

が指摘されました。そこで、①のために、運営会議や教授会議での選考手順のスケジュール見直しを行い、すり合わせのための時間的余裕を作るようにしました。また、③のために、上記(4)を運営会議側から機関長選考委員会に申し入れました。運営会議に置かれた所長候補者選考委員会の委員長は、通常、運営会議議長ではなく、副議長(所外委員が務める)が行うことになっているからです。

以上の変更を踏まえて、平成25年9月3日に運営会議として現所長の1名を機関長選考委員会に推薦することを決定しました。その後、10月7日の機関長選考委員会で審議され、その結果を踏まえて、最終的に11月22日に大峯所長の続投(平成26年4月~平成28年3月)が内定しました。

(小杉 信博 記)